

# 多文化共生研究所設立 10 周年記念シンポジウム

## 「多文化共生社会を目指して： 10 年の実践事例と今後の展望」開催報告

多文化共生研究所副所長  
亀井伸孝

2019 年 12 月 3 日(火)12:50～14:20、愛知県立大学長久手キャンパス学術文化交流センター(K 棟)小ホールにて、多文化共生研究所設立 10 周年記念シンポジウム「多文化共生社会を目指して：10 年の実践事例と今後の展望」が開催された。

多文化共生研究所は、2009 年の新制愛知県立大学の発足とともに、大学院国際文化研究科の附置機関として設立された。以来、研究、教育、社会貢献の各分野で多彩で幅広い活動を繰り広げ、2019 年でちょうど設立 10 周年を迎えた。研究所のこれまでの活動状況を振り返り、その意義を踏まえつつ、今後の研究所のあり方を展望していくための記念シンポジウムを開催した。プログラムは、表 1 の通りである。参加者は、約 40 名であった。

表 1: シンポジウムプログラム(多文化共生研究所広報資料に基づき筆者作成)

趣旨説明 亀井伸孝(愛知県立大学教授、多文化共生研究所副所長)
基調講演「人類学から考える多文化共生」 稲村哲也(愛知県立大学名誉教授、放送大学特任教授、多文化共生研究所初代所長)
話題提供 1「ばっちゃんサミット、先住民族サミットから学んだ "自然との共生"」 日丸美彦(愛知県立大学多文化共生研究所客員共同研究員)
話題提供 2「学際的研究共同体としての多文化共生研究所の意義と新しい挑戦」 小池康弘(愛知県立大学教授、多文化共生研究所所長)
総合討論(司会: 亀井伸孝)

基調講演と話題提供 2 件を通じ、人類進化と多様な環境への適応、普遍的な人間の特徴としての社会性といった人間存在の根幹的な理解から、現代日本社会の共存をめぐる課題まで、トータルな人間と社会の理解に基づいた多文化共生のあり方を目指す必要性が確認された。また、10 年にわたる研究所の社会貢献活動が、地域と大学、人びとを結び付け、それが教育や研究を活性化し、さらなる社会貢献活動を生み出すという優れた循環を生み出してきたことが、事例などから具体的に紹介された。

本法人理事長や、長久手市国際交流協会理事の来場もあり、地域に開かれた大学、研究所のあり方を提議するといった議論の場面も見られた。

終了後、学術文化交流センター(K 棟)2 階のフロアを用いて、カフェ・セッション(お茶やお

菓子を交えた交流会)も開催され、研究所 10 年間の歩みと今後の展望について、学生、教職員、一般市民が歓談する機会をもつこともできた。



写真 1: 基調講演・稲村哲也氏



写真 2: 話題提供 1・日丸美彦氏



写真 3: 話題提供 2・小池康弘氏



写真 4: シンポジウム会場全景

(いずれも 2019 年 12 月 3 日、愛知県立大学長久手キャンパスにて亀井伸孝撮影)